

カルチャー・ショック

外国人のみた日本



Liu Xiangfeng

出身地：中国・済南

所属：国家発展・改革委員会対外経済研究所

日本滞在：2005年7月～2006年3月

日本式いけばな——自然と調和探しの道

劉翔峰

日本式いけばなの源流は中国と縁が深い。あらゆるものが美しく精緻なこの国日本に来てからというもの、半ば好奇心、半ば探求心から、私は努めてこうした日本文化の足跡を探してきた。それがいけばなに夢中になることにつながるとは、当初は思ってもみなかったのだが。

今でも、いけばなの世界に足を踏み入れた日の新鮮さは忘れられない。色とりどりの花々、集中して花を生ける女性たち、フアッシュナブルで前衛的な講師の先生、揺れ動く花影と人々の衣服……。シンブルな花枝が、ここでは思想や直感を表現する作品になる。工夫を凝らして生け込むのだが、完成した作品はまるで自然界にそうしてあったかのように自然で、人の心の琴線にふれる。見る者に感動と、ある種不思議な落ちつきを与えるのだ。

こうした魅力にとりこまれて、私はいけばなのお稽古を始めた。造形と構図、主枝と従枝の選択、密度の調整、濃淡の配色、遠近と背景、角度のバランス、あるいは色のつながりを利用してイメージや流れをつくるなど、その一つ一つに考えさせられ、また驚かされた。きわめてシンブルに見えるながら、いけばなの作品はこのような創意工夫の結晶であったのだ。こうしたことは、

実際に自分で生けてみて初めてわかるおもしろさである。

お稽古の一方で、私は日本の華道の起源と中国のいけばなの変遷を改めて調べてみた。

東洋のいけばなの源は中国にある。中国のいけばなの源流は古い。『詩経』には青年男女が花枝を贈り合ったことが記載されている。これはもともと初期の切り花の応用だといわれる。東漢の時代に宗教いけばなが始まり、随・唐代にはそれが宮廷や民間にも普及した。宋代に入ると、花材の選択、構図、趣、技巧などの各方面で高い水準に達した。元代にはいけばなは徐々に人の心の内を表現するようになり、より手軽で形にとらわれないスタイルになる。その後、明から清代中期にかけてはいけばなのもっとも盛んだった時代で、その後戦乱が激しくなるにつれて衰退してしまった。近年やっと復興し始めたところである。

一方、今や東洋のいけばなの主流となった日本のいけばなは、絶え間なく発展してきた。最初は唐代の中国から仏教とともにいけばなが日本に伝わり、仏前に花を供える祭祀いけばなが定着した。現在の池坊流のもっとも伝統的な花型、「立花」の基礎である。一五、六世紀にいけばなは広く普

及し、一七世紀末に中国から明代のいけばな専門書『瓶史』が日本に伝わって宏道流が創立した。一八世紀以降、「自由花」の様式が出現し、いけばなは民間でも必修の教養となる。この時、花を生けるといいう一般的な行為が「華道」という一種の「道」となった。技巧の習得とともに、品行や人格の修養にも重点がおかれるようになったのである。

私が学ぶ草月流はより自然な形式で、作者の独創性が重んじられる。自然の花枝から新しい形を生み出し、新しい美感を与える。そのためには、花材の美しさを汲み取ることだけでなく、自然との対話が求められる。中国ではいけばなのこうした思想はその最盛期以来徐々に衰退してしまい、経済発展を追い求める今日では、人々は自らいけばなの境地を再現する余裕を持ち合わせてはいない。つまり、中国ではお花はまだ観賞する対象でしかないのが現状である。それが日本では既に華道に発展し、個人の修養を高め、人と人、人と自然の間の調和を目指す一種の修身の道となっている。不思議なことに、ここ日本で私はそのような安らぎと中国の歴史への追憶にふけることになったのである。

(前海外客員研究員／訳＝山口真実)